

青函トンネル北海道方坑道内の地震探査

京都大学防災研究所 正員 吉川宗治

鹿島建設 正員 佐藤忠五郎 正員 田村 計

○ 阪神コンサルタンツ 正員 望月 宏

1. 緒 言

日本鉄道建設公団が昭和47年5月より施工に着手した本州と北海道とを結ぶ新幹線鉄道用青函トンネル建設工事現場において、昭和48年11月初～12月初にわたり、主として掘進中の作業坑と先進導坑を利用して地震探査を実施し、作業坑と先進導坑の側壁の物理定数および両坑道間の物理定数を測定し、また作業坑より本坑前方に直角方向に穿孔せるボーリング孔を利用した地震探査を実施した。

この探査の目的は、①今後の本坑切羽前方の岩盤状況を予測すること、②昭和48年6月末より作業坑、先進導坑にあらわれた大きな断層帯(F-10断層)と目前にして、現在両側壁先進導坑方式にて掘進中の本坑の掘削方法を大断層帯に対応して、どの地点より変更してさらに安全確実な掘削方法にするかを決定すること、の2つである。

探査箇所地質は、新第三紀中新～鮮新世の訓鍾層とよばれるもので、緑色凝灰岩、角礫凝灰岩、およびそれらと砂岩、泥岩との互層であり、部分的に玄武岩の貫入がみられる。

2. 探査方法

2-1. 坑道沿いの探査

①探査位置

探査位置は、図-1に示すように、作業坑では、作業坑距離2174.0～3349.0m間の斜坑方から切羽に向かって左側の側壁であり、先進導坑では、先進導坑距離1630.5～2661.6m

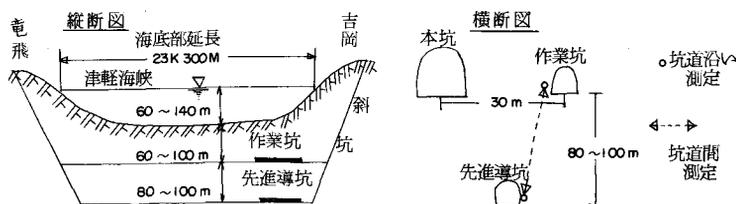


図-1 探査位置の模式図

間の斜坑方から切羽に向かって右側の側壁である。

地震探査測線の坑道底よりの高さは、原則として1.0mとしたが、種々の坑内設備のため、1.0mの高さにとれない箇所は適宜上下させた。なお、測線は、種々の坑内設備のためかならずしも連続してとれたわけではない。

②探査に用いた機器

地震計：米国GEO-SPACE社製HS-J型地震計。固有共振周波数は、作業坑では14Hz、先進導坑では28Hz。

増幅器：作業坑、先進導坑とも北斗理研製作社製のGA-123型低周波増幅器。

記録器：三栄測器株式会社製のMR-101A型(作業坑)およびMR-102B型(先進導坑) 電磁オシログラフ。ガルバノメーターは同じく三栄測器株式会社製のG-100型。

測定系の総合特性を図-2に示す。

なお、ショットマークは、ダイナマイトにリード線を巻き、爆発によりこのリード線が切れた瞬間を記録する方法をとった。

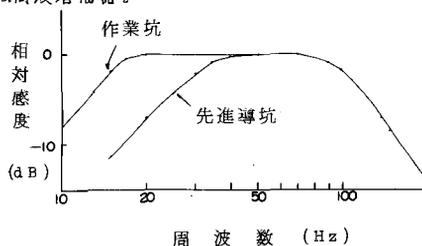


図-2 測定系の総合特性

ポアソン比
$$V = \frac{\frac{1}{2} \left(\frac{V_p}{V_s} \right)^2 - 1}{\left(\frac{V_p}{V_s} \right)^2 - 1}$$

動弾性ヤング率
$$E \left(\frac{kg/cm^2}{} \right) = \rho \cdot V_p^2 \cdot \frac{1}{\rho} \cdot \frac{(1+V)(1-2V)}{(1-V)}$$

剛性率
$$G \left(\frac{kg/cm^2}{} \right) = \rho \cdot \frac{1}{\rho} \cdot V_s^2$$

ただし、ここで

V_p : P波の速度

V_s : S波の速度

ρ : 密度

g : 重力の加速度 (980 cm/sec^2)

坑道沿いの探査における一つのトピックスは、先進導坑1685.5~1740.5mの測定(発破点633.1m)において明瞭なS波の反射波がみられたことである。この反射波の見かけ周期は7ms(約143Hz)で屈折波の見かけ周期と全く同じである。この反射波がどちらの方向からはいつてきた波が明らかではないが、一応屈折波の速度層断面内に反射面があるものと仮定すると反射面は42~43mの深さにあり、この反射面は火山礫凝灰岩または泥岩と玄武岩との境界面である可能性が高い。

反射S波の記録を図-3に示す。

3-2. 側壁とボーリング孔を利用した探査

探査結果を、あたかも孔口で発破をおこなったように補正して表-3および表-4に示した。

3-3. 坑道間の探査

坑道沿いの探査と同様に、坑道間の探査の結果得られたP波とS波の速度より岩盤の基礎物理定数と計算し表-5および表-6に示した。

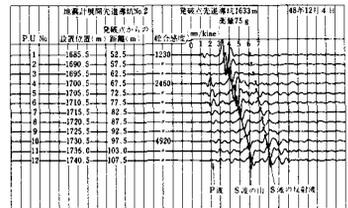


図-3 反射S波の記録

4. 探査結果による岩盤区分

P波とS波の速度より算出した岩盤の基礎物理定数のうち、ポアソン比と動弾性ヤング率をもとにして岩盤を区分した結果を次頁の図-4に示した。

区分の基準は表-7および表-8である。

表-7は斜坑に近い作業坑距離程で2170~2330m間に適用し、表-8は2330m以遠に適用した。

深さ(m)	地質	Vp (m/s)	Vs (m/s)
0	泥岩~砂質凝灰岩(粗土状)	1,000	800
50	凝灰質泥岩(粗土状)		
100	凝灰質泥岩(粗土状)		
150	火山礫凝灰岩(粗土状)	2,200	1,000
175	火山礫凝灰岩(粗土状)		
200	玄武岩		
250	火山礫凝灰岩(粗土状)	1,700	700
300	砂質凝灰岩	2,200	1,000
350	火山礫凝灰岩	1,800	800
380	火山礫凝灰岩(粗土状)	2,200	1,000
400	砂質凝灰岩(粗土状)	1,600	700
450	玄武岩	2,600	1,100
500			

表-3 ボーリング孔の深度によるVpとVsの値

深さ(m)	Vp (m/s)	Vs (m/s)	ポアソン比(V)	ヤング率E (kg/cm ²)	剛性率G (kg/cm ²)
0	200	1000	0.00	0.00	0.00
50	200	2200	1.00	0.00	5.0
100	200	2200	1.00	0.00	5.0
150	200	2200	1.00	0.00	5.0
200	200	2200	1.00	0.00	5.0
250	200	2200	1.00	0.00	5.0
300	200	2200	1.00	0.00	5.0
350	200	2200	1.00	0.00	5.0
400	200	2200	1.00	0.00	5.0
450	200	2200	1.00	0.00	5.0
500	200	2200	1.00	0.00	5.0

表-4 側壁とボーリング孔利用した探査の結果得られた基礎物理定数表

深さ(m)	Vp (m/s)	Vs (m/s)	ポアソン比(V)	ヤング率E (kg/cm ²)	剛性率G (kg/cm ²)
2170	2170	1500	0.25	10000	4000
2200	2200	1500	0.25	10000	4000
2230	2230	1500	0.25	10000	4000
2260	2260	1500	0.25	10000	4000
2290	2290	1500	0.25	10000	4000
2320	2320	1500	0.25	10000	4000
2350	2350	1500	0.25	10000	4000
2380	2380	1500	0.25	10000	4000
2410	2410	1500	0.25	10000	4000
2440	2440	1500	0.25	10000	4000
2470	2470	1500	0.25	10000	4000
2500	2500	1500	0.25	10000	4000
2530	2530	1500	0.25	10000	4000
2560	2560	1500	0.25	10000	4000
2590	2590	1500	0.25	10000	4000
2620	2620	1500	0.25	10000	4000
2650	2650	1500	0.25	10000	4000
2680	2680	1500	0.25	10000	4000
2710	2710	1500	0.25	10000	4000
2740	2740	1500	0.25	10000	4000
2770	2770	1500	0.25	10000	4000
2800	2800	1500	0.25	10000	4000
2830	2830	1500	0.25	10000	4000
2860	2860	1500	0.25	10000	4000
2890	2890	1500	0.25	10000	4000
2920	2920	1500	0.25	10000	4000
2950	2950	1500	0.25	10000	4000
2980	2980	1500	0.25	10000	4000
3010	3010	1500	0.25	10000	4000
3040	3040	1500	0.25	10000	4000
3070	3070	1500	0.25	10000	4000
3100	3100	1500	0.25	10000	4000
3130	3130	1500	0.25	10000	4000
3160	3160	1500	0.25	10000	4000
3190	3190	1500	0.25	10000	4000
3220	3220	1500	0.25	10000	4000
3250	3250	1500	0.25	10000	4000
3280	3280	1500	0.25	10000	4000
3310	3310	1500	0.25	10000	4000
3340	3340	1500	0.25	10000	4000
3370	3370	1500	0.25	10000	4000
3400	3400	1500	0.25	10000	4000
3430	3430	1500	0.25	10000	4000
3460	3460	1500	0.25	10000	4000
3490	3490	1500	0.25	10000	4000
3520	3520	1500	0.25	10000	4000
3550	3550	1500	0.25	10000	4000
3580	3580	1500	0.25	10000	4000
3610	3610	1500	0.25	10000	4000
3640	3640	1500	0.25	10000	4000
3670	3670	1500	0.25	10000	4000
3700	3700	1500	0.25	10000	4000
3730	3730	1500	0.25	10000	4000
3760	3760	1500	0.25	10000	4000
3790	3790	1500	0.25	10000	4000
3820	3820	1500	0.25	10000	4000
3850	3850	1500	0.25	10000	4000
3880	3880	1500	0.25	10000	4000
3910	3910	1500	0.25	10000	4000
3940	3940	1500	0.25	10000	4000
3970	3970	1500	0.25	10000	4000
4000	4000	1500	0.25	10000	4000

表-5 坑道間の探査の結果得られた基礎物理定数表(1) (作業坑発振、先進導坑発振)

深さ(m)	Vp (m/s)	Vs (m/s)	ポアソン比(V)	ヤング率E (kg/cm ²)	剛性率G (kg/cm ²)
2170	2170	1500	0.25	10000	4000
2200	2200	1500	0.25	10000	4000
2230	2230	1500	0.25	10000	4000
2260	2260	1500	0.25	10000	4000
2290	2290	1500	0.25	10000	4000
2320	2320	1500	0.25	10000	4000
2350	2350	1500	0.25	10000	4000
2380	2380	1500	0.25	10000	4000
2410	2410	1500	0.25	10000	4000
2440	2440	1500	0.25	10000	4000
2470	2470	1500	0.25	10000	4000
2500	2500	1500	0.25	10000	4000
2530	2530	1500	0.25	10000	4000
2560	2560	1500	0.25	10000	4000
2590	2590	1500	0.25	10000	4000
2620	2620	1500	0.25	10000	4000
2650	2650	1500	0.25	10000	4000
2680	2680	1500	0.25	10000	4000
2710	2710	1500	0.25	10000	4000
2740	2740	1500	0.25	10000	4000
2770	2770	1500	0.25	10000	4000
2800	2800	1500	0.25	10000	4000
2830	2830	1500	0.25	10000	4000
2860	2860	1500	0.25	10000	4000
2890	2890	1500	0.25	10000	4000
2920	2920	1500	0.25	10000	4000
2950	2950	1500	0.25	10000	4000
2980	2980	1500	0.25	10000	4000
3010	3010	1500	0.25	10000	4000
3040	3040	1500	0.25	10000	4000
3070	3070	1500	0.25	10000	4000
3100	3100	1500	0.25	10000	4000
3130	3130	1500	0.25	10000	4000
3160	3160	1500	0.25	10000	4000
3190	3190	1500	0.25	10000	4000
3220	3220	1500	0.25	10000	4000
3250	3250	1500	0.25	10000	4000
3280	3280	1500	0.25	10000	4000
3310	3310	1500	0.25	10000	4000
3340	3340	1500	0.25	10000	4000
3370	3370	1500	0.25	10000	4000
3400	3400	1500	0.25	10000	4000
3430	3430	1500	0.25	10000	4000
3460	3460	1500	0.25	10000	4000
3490	3490	1500	0.25	10000	4000
3520	3520	1500	0.25	10000	4000
3550	3550	1500	0.25	10000	4000
3580	3580	1500	0.25	10000	4000
3610	3610	1500	0.25	10000	4000
3640	3640	1500	0.25	10000	4000
3670	3670	1500	0.25	10000	4000
3700	3700	1500	0.25	10000	4000
3730	3730	1500	0.25	10000	4000
3760	3760	1500	0.25	10000	4000
3790	3790	1500	0.25	10000	4000
3820	3820	1500	0.25	10000	4000
3850	3850	1500	0.25	10000	4000
3880	3880	1500	0.25	10000	4000
3910	3910	1500	0.25	10000	4000
3940	3940	1500	0.25	10000	4000
3970	3970	1500	0.25	10000	4000
4000	4000	1500	0.25	10000	4000

表-6 坑道間の探査の結果得られた基礎物理定数表(2) (作業坑発振、先進導坑発振)

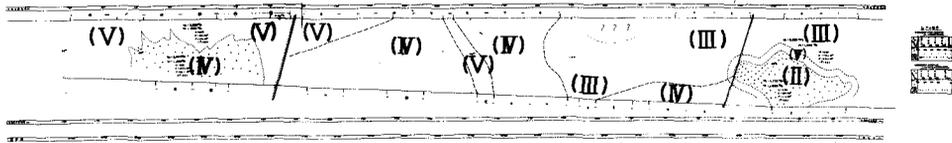


図-4 地震探査結果による岩盤区分図

なお、ポアソン比とヤング率が同じ区分に属さない場合はどちらか悪い方に区分した。

物理定数	区分	非常に良い (I)	大体良い (II)	やや悪い (III)	相当悪い (IV)	非常に悪い (V)
ポアソン比 ν		0.25 - 0.33	0.3 - 0.4	0 - 0.42	0.43 - 0.50	
動弾性ヤング率 E (MPa) $\times 10^4$		30以上	~15	~8	~4	4以下

5. 結 言

前記の地震探査の結果から土木工学的見地より今後の本坑掘削に対する考え方を取りまとめると次のようになる。

今回探査を実施した約1100mにわたる区間は、全般的には凝灰岩に泥岩の混入し

た訓練層と称する地質であるが、大別して三つの区間に分類して考慮すべきであろう。

すなわち、作業坑で示せば図-4に示す如く、第一の区間は斜坑に近い作業坑距離程2170~2330m間で、玄武岩が緩かに噴出してきたと考えられ、 $V_p=2500\%$ 、 $V_s=1200\%$ と比較的岩質が安定している。この区間については、表-7の基準が適用でき、岩盤の状態は“大体良い”、あるいは“やや悪い”と判断される。

第二の区間は、2330~3010m間でこの区間は表-7で示す一般的な岩盤の基準を適用することは適当でなく、この区間の如く凝灰岩に泥岩の混入したような不良岩盤の場合には、表-7の一般的な基準を“一ランク”下げて考える必要があり、表-8を基準として岩盤の状態を判断することが妥当であろう。したがって第二の区間は大部分が“相当悪い”あるいは“非常に悪い”と判断される。

第三の区間は3010~3350m間で、この区間では訓練層に玄武岩が荒々しく噴出し、第一の区間に比し $V_p=2300\%$ 、 $V_s=800\%$ と速度が低く、非常に岩盤が乱れ、いたるところに切りを起し易い状態を形成したものと考えられ、この場合も表-8の基準を適用すべきであろう。したがって第三の区間は大部分が“非常に悪い”岩盤と判断される。

また、3034.0mに穿孔したボーリング孔を利用した探査の結果をみると、作業坑、先進導坑にて表示された物理定数で示される岩盤の良否の区分と大差ないものと類推される。

したがって、今後の吉岡方本坑の掘削においては、作業坑距離程に示す2300m付近までは、現在採用している両側壁先進導坑方式による掘削が可能であろうと判断される。

しかし、2300m以遠3350m(昭和48年10月末現在の切羽)までの約1000mにわたる区間の施工法に関しては、探査結果による坑道側壁あるいは上下坑道間の物理定数が示すように、岩盤状態が不良であって両側壁先進導坑方式による掘削が極めて困難と考えられるので、施工法を再検討の上、さらに安全確実な施工法を採用することが望ましい。

この際、坑道側壁の“ゆるみの値”と、施工中の増し支保工区間、あるいは縫返し区間、盤ぶくれ区間等の諸条件をも十分考慮して、今後の吉岡方本坑の施工法を決定することが望ましい。

表-7 岩盤区分 (1)

物理定数	区分	大体良い (I)	やや悪い (III)	相当悪い (IV)	非常に悪い (V)
ポアソン比 ν		0.25 - 0.33	0.3 - 0.4	0.40 - 0.42	0.50
動弾性ヤング率 E (MPa) $\times 10^4$		15以上	~8	~4	4以下

表-8 岩盤区分 (2)

Seismic Prospecting in Seikan Tunnel, Hokkaido Side

Kyoto University
Sōji YOSHIKAWA

Kajima Corporation
Chugorō SATOH
Hakaru TAMURA

Hanshin Consultants
Hiroshi MOCHIZUKI

The purposes of this prospecting are as follows;

(1) predicting the conditions of rock-masses where main tunnel will be excavated,

(2) deciding the point where the method for excavation of main tunnel will be changed because of bad conditions of rock-masses.

To attain these purposes, authors executed seismic prospecting in two tunnels, side service tunnel (2,174.0~3,349.0m) and pilot tunnel (1,630.5~2,661.6m).

Physical constants (Poisson's ratio, dynamic Young's modulus, rigidity) of rock-masses are obtained in and inter these tunnels, and authors decided the point where the method for excavation of main tunnel would be changed.

These results are explained in detail in this paper.